資　料

平成25年度自立教科等担当教員（理療）講習会／教員免許状更新講習より

「五行論の誕生と医学的発展」講義資料（その２）

林　克
大東文化大学文学部

騶衍の陰陽主運説（表４）

「五行相い次ぎ転じて事を用い、方面に随いて服を為す」は、東方が木、南方が火、中央が土、西方が金、北方が水で、春夏秋冬が相い次いで事を用いる（作用する、仕事を行う）もので、『呂氏春秋』や『礼記〔ライキ〕』月令や『淮南子〔エナンジ〕』が述べるようなものである。　（銭穆〔センボク〕説）

表４　陰陽主運説

五行相い次ぎ転	じて事を用い	壬午冬至、甲子に制を受け、木事を用い、火煙は青 七十二日、丙子に制を受け、火事を用い、火煙は赤 七十二日、戊子に制を受け、土事を用い、火煙は黄 七十二日、庚子に制を受け、金事を用い、火煙は白 七十二日、壬子に制を受け、水事を用い、火煙は黒 七十二日にして歳終わる、庚午に制を受く。	「壬午冬至」一文の訳 壬午の日が冬至の時、42 日後の甲子の日に天命を受け、その日から木が任に当る。（木の任が全うされるよう、）青い火煙を出す樹木を燃やし続ける。	『淮南子』天文訓
方面に随いて	服を為す	甲子に制を受くれば則ち柔惠を行い、群禁を挺め、闔扇を開き、障塞を通じ、木を伐る毋かれ。 丙子に制を受くれば則ち賢良を挙げ、有功を賞し、… 戊子に制を受くれば則ち老鰥寡を養い、… 庚子に制を受くれば則ち牆垣を繕い、城郭を修め、群禁を審かにし、兵甲を飾え、百官を儆め、不法を誅す。 壬子に制を受くれば則ち門閭を閉ぢ、大に客を搜し、刑罰を断じ、当罪を殺し、関梁を息め、外徙を禁ず、	「甲子に制を受く」一文の訳 甲子に日に天命を受け（木が任に当たるようになっ）たならば、（木の任に対応する諸策、則ち）慈しみを実行し、諸々の禁令をゆるめ、閉じられていた扉を開き、交通の障害を除去して通じさせる。樹木の伐採を禁止する。 （『呂氏春秋』『礼記』参照）	

『呂氏春秋』や『礼記』における「方面に随〔しがう〕いて服を為〔な〕す」（銭穆説）

春の最初の月（旧暦１月）、天子は明堂の青陽殿（東向き部分）の左側（北側）の部屋に居住し、青色の乗用車に乗り、青みがかった大馬に引かせ、青い旗を立て、青い服を着、青い玉を身につけ、麦と羊肉を主食とする。（春の二番目、三番目の月も同じようにする）

夏の最初の月（旧暦４月）、天子は明堂の明堂殿（建物全体が明堂、その南向き部屋も同名）の左側（東側）の部屋に居住し、以下食事以外、色が赤に変わるだけで春と同じ。主食は豆と鶏肉。

秋の最初の月（旧暦７月）、天子は明堂の総章殿（西向き部分）の左側（南側）の部屋に居住し、以下、車と食事以外、色が白に変わるだけで春と同じ。乗るのは兵車、主食は麻の実と犬肉。

冬の最初の月（旧暦 10 月）、天子は明堂の玄堂殿（北向き部分）の左側（西側）の部屋に居住し、以下、車と食事以外、色が黒に変わるだけで春と同じ。乗る車は鉄色、主食は黍と彘肉。

『呂氏春秋』と『礼記』によれば、立春・立夏・立秋・立冬の三日前に大史〔タイシ〕が天子に「某日立春、盛徳 木にあり」「某日立夏、盛徳 火にあり」「某日立秋、盛徳 金にあり」「某日立冬、盛徳 水にあり」と告げる。この記述は、四季のそれぞれに応じる木火（土）金水の五徳があることを示す。また、『史記』夏本紀〔カホンギ〕の鄭玄注に「五行は四季の盛徳に従って行う政〔まつりごと〕である」と言う。

以上から推定できる陰陽主運説は次の通り。

四季それぞれに盛徳があり、それを総称して五徳という。五気である五行があり、五徳に対応して順次任務にあたる五徳に対応して行う政があり、これも五行という。まとめると、陰陽主運説は五徳と五行の対応を基本とし、その五行には五気としての五行と、政としての五行の二種がある。

五行の成立

陰陽に比べて五行の由来は複雑。

（1）五材的五行

基礎生産材ないし生活必需物質としての五材（金・木・水・火・土）

先王は土と金木水火とを組み合わせてあらゆるものを作った。 『国語』鄭語

天は五材を生じたが、民はそのすべてを利用するので、どれ一つとして欠くことができず、従って誰も兵器兵力をなくせない。兵器兵力が作られてから長い時間が経過した。兵器兵力は無道を抑え、文化的に優れたものを表彰するための道具である。聖人はそれに拠って立ち、世を乱す者はそれに拠って亡んだ。国家の廃興存亡、混迷覚醒は全て兵器兵力に基づく。 『左伝』襄公27年

『左伝』は五材が兵器の素材であることに言及。→『孫子』や『墨子』に注目。

軍事に何時も決まった方策はなく、水には何時も決まった形はない。敵の状況の応じて変化でき、勝利を収める事ができること、これを神（人間離れした能力をもつこと）という。それ故、五行には常に勝つものが無く、四時には常に居座るものが無く、日の長さには短長が有り、月には満ち欠けが有る。

『孫子』虚実

墨家は主要な主張に非攻（攻撃否定）を掲げ、自分たちから攻撃を仕掛けることはないが、攻撃された場合、完璧な守備を行うべく、軍事に関連する高度な思想・技術を有した。

五行には常に勝つものが無い。適宜ということを述べている。 『墨子』経下〔ケイカ〕

守城の法、木〔き〕は蒼旗〔あおはた〕、火〔ひ〕は赤旗、薪樵〔たきぎ〕は黄旗、石〔いし〕は白旗、水〔みず〕は黒旗。

『墨子』旗幟〔キシ〕（はたじるし）

素材の違いを異なる旗色〔はたいろ〕で連絡する旗幟篇を参考に、「五行には常に勝つものが無く、状況に応じた適宜が宜しい」を考察すると、経下篇は敵の兵器を見た上で、それに対して最も有効な味方の兵器選択の原則を述べる記述と推定できる。

→土・木・金・火・水の相勝〔ソウショウ〕の序列

（2）洪範〔コウハン〕の五行

①『尚書』洪範

洪範は『尚書』の一篇。周の武王が殷〔イン〕の紂〔チュウ〕王に勝利の後、紂のオジで賢人の箕子〔キシ〕を尋ね、昔、上帝が夏王朝の始祖 禹に与えた偉大な規範とされる洪範の話を聞き、それに基づいて作られた篇。

洪範九疇〔キュウチュウ〕（大法則九条）の第一は五行、第二は五事を敬虔に用いる事、第三は八政〔ハッセイ〕を手厚く用いる事、第四は五紀〔ゴキ〕を調整して用いる事、第五は政治を行う際に皇極〔コウキョク〕を用いる事、第六は民を治めるのに三徳を用いる事、第七は明快に疑問を考える事、第八はよく考えて庶徴を用いる事、第九は五福で人を奨励し、六極〔リッキョク〕で人を威して阻止する事。

一、五行、一番目が水、二番目が火、三番目が木、四番目が金、五番目が土。水は潤下〔ジュンカ〕する（物を潤し流れ下る）、火は炎上する、木は曲直する（丸くも真っ直ぐにも撓〔たわ〕められる）、金は従革〔ジュウカク〕する（溶かしてどんな形も作れる）、土は稼穡〔カショク〕する（穀物を植え収穫できる）。潤下は鹹〔しおからさ〕を、炎上は苦〔にがさ〕を、曲直は酸〔すっぱさ〕を、従革は辛〔からさ〕を、稼穡は甘〔あまさ〕を、それぞれ作る。
（以下略）

洪範五行の特徴

a. 五行各々が固有の序数、素材としての性質、五味との関連を持ち、民の五材に近い
b. 固有の序数順に並べると水火木金土という生成の序列
c. は時令発布の場所とされる明堂や風占い用の占盤と構成が基本的に同じ

b.に関連して：**洪範九疇の平面的構成**（図３）

易〔エキ〕の繫辞伝〔ケイジデン〕に「河〔カ〕は図〔ト〕を出だし、洛〔ラク〕は書を出だし、聖人は之に則る」と云う。「九疇」は各々に文字が有るのだから、書（文書）である。一方、「天は禹に錫〔たま〕わった」（洪範本文）と云うのだから、天が禹に与えたものは洛書であることが分かる。…孔安国〔コウアンコク〕が考えるには、九疇は神亀〔シンキ〕が文字を背負って川から出てきた時、背に一から九までの数が有り、禹はその文を見ると、それに基づいて順序良く並べ、この九疇をまとめた。

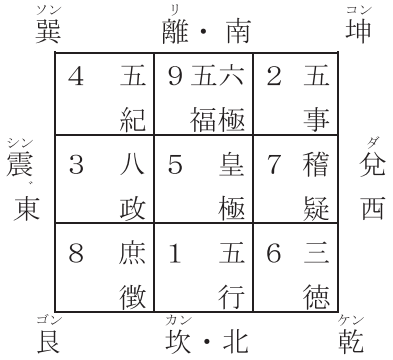


図３　洪範九疇

『尚書正義』（唐の『五経正義』の『書経』部分）

尚書洪範に云う、第一は五行。位は北方、…第二は五事を敬虔に用いる。位は西南方、…第三は農業に八政を用いる。位は東方、…第四は五紀を調整して用いる。位は東南方、…第五は政治を行う際に皇極を用いる、位は中宮〔チュウキュウ〕、…第六は民を治めるのに三徳を用いる。位は西北、…第七は明快に疑問を考える。位は西方、…第八はよく考えて庶徵を用いる。位は東北、…第九は五福で人を奨励し、六極で人をおど威してソシ阻止する。位は南方、…故に黄帝九宮経〔コウテイキュウキュウケイ〕に云う、九を戴〔いただ〕き一を履〔ふ〕み、三を左にし七を右にし、二と四を角〔かど〕と為し、六と八を足と為し、五は中宮に居〔お〕り、得失を総御〔ソウギョ〕す。其の数は則ち坎〔カン〕一、坤〔コン〕二、震〔シン〕三、巽〔ソン〕四、中宮五、乾〔ケン〕六、兌〔ダ〕七、艮〔ゴン〕八、離〔リ〕九。

『五行大義』巻一

②**明堂**（図４）

上を向いてはモデルを天体の現象に求め、下を眺めては基準を地に求め、中ほどでは掟を人事に求めた。そこで明堂の朝廷を設けて、

明堂の政令を施行し、それによって陰陽の気を調節し、四季の季節を調和させ、病気の災難を避けるのである。下を眺めて地理を調べ、そうして度量を制定し、土地の起伏、河や湖沼、土地の肥瘦、土地の高低に適した物を観察し、それを基に事業を行い、財産を生みだし、飢えや凍えの心配を取り除くのである。中ほどでは人の能力を考慮し、それによって礼楽を制定し、仁義に則るやり方をし、人の守るべき事をちゃんとやって、混乱による災禍を取り除く、ここにおいて金木水火土の性質をよく発揮させるのである。

『淮南子』泰族訓〔タイゾククン〕

四	九	二
三	五	七
八	一	六

図４　明堂

明堂というものは、昔、存在した。全部で九室、一室毎に四つの出入り口と八つの窓があり、全部で36の出入り口と72の窓がある。堂は茅で屋根を覆い、上は円形で、下は方形である。…明堂の中で月令を施行する。赤色〔あかいろ〕で入り口を飾り、白色〔しろいろ〕で窓を飾る。九室の配置は二九四・七五三・六一八で ある。

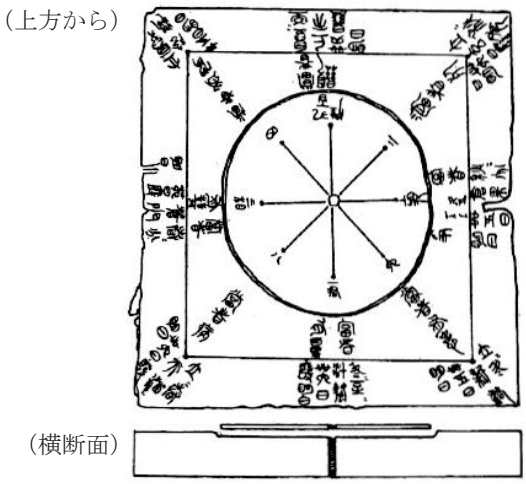
『大戴礼記〔ダタイライキ〕』明堂

③太一九宮占盤〔タイイツキュウキュウセンバン〕（図５、６）

1977年7月、中国安徽省〔アンキショウ〕阜陽県〔フヨウケン〕の・汝陰侯墓〔ジョインコウボ〕から出土した三種の占術用器機の一つが太一九宮占盤。占盤は方形の地盤の上に円形の天盤が乗り、地盤中央の軸が天盤中央を貫き、天盤を回転させる。

立秋は二、宮（太一神〔タイイツシン〕のいる所）は玄委。秋分は七、宮は倉果。立冬は六、宮は新洛。夏至は九、宮は上天。招揺は五。冬至は一、宮は汁蟄。立夏は四、宮は陰洛〔インラク〕。春分は三、宮は蒼門。立春は八、宮は天溜。

太一は常に冬至の日から46日間、汁蟄の宮に居る。翌日から46日間、天溜に居る。翌日から46日間、蒼門に居る。翌日から46日間、陰洛に居る。翌日から46日間、上天に居る。翌日から46日間、玄委に居る。翌日から46日間、倉果に居る。翌日から46日



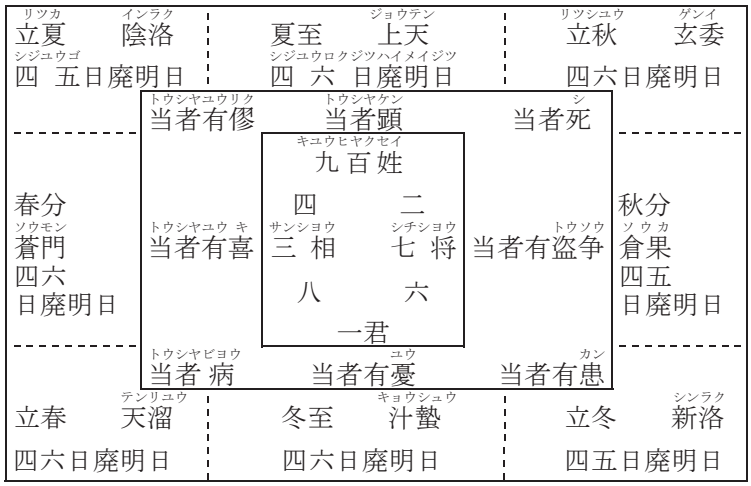


図５　太一九宮占盤

中央枠は天盤、外側枠は地盤外側、両者の間は地盤内側。
地盤外側文字の意味は『霊枢』（『太素』）九宮八風参照。

四	当たる者は殺される	九・百姓（ハクセイ）	当たる者は栄える	二	当たる者は死ぬ
三・相（ショウ）	当たる者は幸せになる			七・将（ショウ）	当たる者は盗みや争いに遭う
八	当たる者は病む	一・君	当たる者は悩む	六	当たる者は苦しむ

『霊枢』（『太素』）九宮八風篇：この篇は、太一九宮占盤の解説資料的文献と言える。

図６　地盤内側文字の釈文

間、新洛に居る。翌日また汁蟄の宮に居る。汁蟄の宮から、太一神の所在を数える時、毎日一つの所を移り、九日になると、再び一に戻る。常にこの様にして終わることが無く、一回りするとまた始まる。

太一神が移る日に天は必ず風雨によって対応する。移る日に風雨があれば、その年は吉歳〔キチサイ〕、民は安らかで病が少ない。風雨が太一神の移る日に先立てば雨が多い。風雨が移る日に遅れれば旱〔ひでり〕が多い。太一神が冬至に居る日に異変があると、「（天盤の）君」によって占う。太一神が春分に居る日に異変があると、「相」によって占う。太一神が中宮に居る日に異変があると、「吏」によって占う。太一神が秋分に居る日に異変があると、「将」によって占う。太一神が夏至に居る日に異変があると、「百姓〔ヒャクセイ〕」によって占う。

④近年出土の文物から明らかになった禹の聖王以外の性格→洪範の占卜的性格を示唆

蚖（ガン：毒蛇〔ドクジャ〕の一種）[に噛まれた時]…別方〔ベッポウ〕。泥水〔どろみず〕を沈澱させ、その上澄みを杯に一杯掬〔すく〕ってひさごの中に入れ、左手にこれをささげ、北を向き、病人に向かって三度禹歩し、その名を尋ねて、そこで言う、「某某〔ボウボウ〕、年〔とし〕は□、今〔いま〕は□」と。水を半杯飲んで言う、「病気は□□治る。ゆっくり離れ、ゆっくり治れ」と。そこでひさごを伏せて、そこを離れる。（□は未読文字、以下同じ）　馬王堆帛書『五十二病方』

いぼ…別方。晦日〔みそか〕の午後の餔時〔ホジ〕（15時前後）に、鶏卵大の土塊〔つちくれ〕を、男は七個、女は十四個取り、先ず土塊を部屋の後ろに置き、南北に並べる。暗くなったら土塊の所に行き、三度禹歩する。南の方より始め、土塊を取りながら「土塊よ」と呼びかけ、更に「今日は晦日、いぼを北側にこする」と言う。土塊で□を一度こする。こすり終わったら、土塊をその場所に置き、そこを離れる時に振り返ってはならない。大きないぼをこする例。　馬王堆帛書『五十二病方』

家を出て県や郷〔キョウ〕の門の中央にある扉止めに着いたなら、三度禹歩し、一歩進む毎〔ごと〕に「ああ、敢えて申します」と叫び、続いて「私の旅に災いが無いように！出発に先立ち禹王の為〔ため〕に道を祓〔はら〕います」と叫ぶ。その後、地面を五分割し、五分割の中央の土を拾って（お守りとして）携帯する。　雲夢秦簡〔ウンボウシンカン〕『日書』

禹歩（図７）

禹は黄河と長江の水捌けを良くし続け、十年間、家に戻らなかった。手に爪なく、脛に毛なく、半身不随となり、歩行時に後足が前足を超えなかった。人はそれを禹歩と呼んだ。

『尸子〔シシ〕』巻上、君治篇

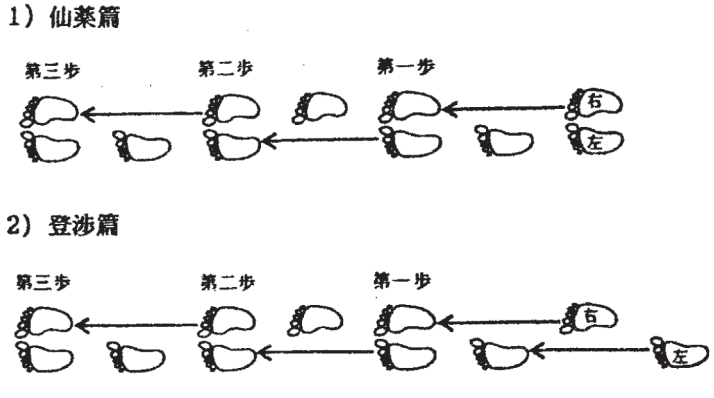


図７　『抱朴子内篇』にみえる禹歩のステップ
（坂出祥伸氏の作図による）

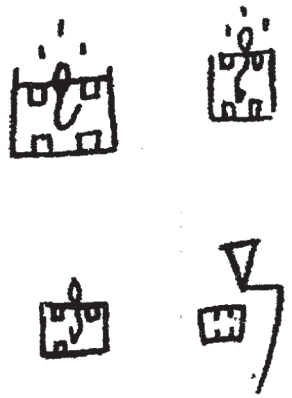


図８　齲歯
右辺の四図は甲骨文の「齲」。

図７は晋の葛洪『抱朴子』内篇に見える禹歩の記述を図で表したもの。仙薬篇は仙人になるための薬について述べ、仙薬の材料採取の時に悪霊を避けるために行う禹歩を記述する。登渉篇は仙道修行や仙薬製造のために山に登る際に習得しておくべき事柄を述べ、その中には仙薬篇とはわずかに異なる禹歩が記述される。禹の呪術的能力を利用するものである。

齲歯（図８）

禹は帝 舜の命を受け、大洪水を治めて天下に秩序を与え、舜から禅譲を受けて夏王朝を開いたとされる。しかし、虫歯を意味する「齲」は甲骨文字に既に見え、元来は人に害を与える存在であった事がうかがえる。その被害を避ける目的で祭祀の対象とし、それが人を守る聖王へと変遷したものであろう。

（3）子思・孟軻の五行

子思（孔子の孫）と孟軻（性善説の孟子）が唱えた五行説。

歴史を研究して説を作り、五行と呼ぶ。その説は偏っていて法則性がなく、ぼんやり翳んで明快な説明がなく、内にこもって外に開いた答えがない。それでいて言葉を飾り、それをもって「これは人類の師・孔子の本当の言葉だ」と言う。子思が主唱し、孟軻が相づちを打つ。世俗の愚鈍な儒者は、附和雷同して誤りに気づかない。結局、その説を受け入れて伝え、孔子・子游はこの説のために後世に尊ばれたと考える。これが子思と孟軻の罪である。　『荀子』非十二子篇

唐の楊倞〔ヨウリョウ〕は「五行は五常で、仁義礼智信のことだ」と注したが、この五行が何かについて、定論がなかった。近年、馬王堆漢墓から出土した帛書『五行篇』は、仁・義・礼・智・聖〔セイ〕を先天的・内面的な「徳」と後天的・外面的な「行〔コウ〕」の二面において捉え、「行」の実践的統一により「徳」を完成させ、国家を興隆させることを説く、と解釈できる論説を述べている。

人の内面において（先天的自然的に）形成されている「仁」を「徳の行い」といい、内面において形成されるのではなく（後天的人為的な努力に依って形成された）「仁」を「行い」という。「知」…「義」…「礼」…「聖」…。「徳の行い」の五つが調和したものを「徳」といい、四つの「行い」が調和したものを「善」という。「善」は人道であり、「徳」は天道である。　『帛書五行篇』1章 経〔ケイ〕

よく調べると、『孟子』尽心下〔ジンシンカ〕篇に「仁義礼智聖」があった。これにより、荀子が非難する子思・孟子の五行は仁義礼智聖の五徳ないし仁義礼智信の五常を指すとする説が固まりつつある。

父子の間の「仁」、君臣の間の「義」、・主人の間の「礼」、賢者における「知」、天道における「聖人」、これらは天命で定められたもの。しかし、天与であるが人為的に育成すべき「性」が人にはあるので、君子は「命（天命だから何もしないでよい）」と言わないのだ。

『孟子』尽心下

宋代に『孟子』に注を付けた大学者・朱子は、「聖人」の記述について、「人」字は余計なものが誤って加えられたという説を紹介している。約2,200年前の情報を現代に届けた『帛書五行篇』の出現は、その説の妥当性を示すものである。

『帛書五行篇』と『孟子』尽心下における思想の共通性

『帛書五行篇』

徳の行い：先天的自然的に形成されるもの

行い：　後天的人為的な努力に依って形成するもの

『孟子』尽心下

命　天与で人為の及ばないもの

性　天与であるが人為的に育成すべきもの

『漢書』芸文志・六芸略・儒家

『孟子』十一篇［名は軻〔カ〕、鄒人〔スウひと〕、子思の弟子〔テイシ〕、列伝有り］

後漢・趙岐「孟子題辞」

11篇だった『孟子』中の4篇を孟子本来の文章ではないとして削除し、7篇だけに注を付け、後世に伝えた。「五行」は削除部分にあったと思われる。

又〔ま〕た外書四篇有り、性善・弁文・説孝経・為政なり。其の文弘く深きこと能わず、内篇七篇と相い似ず。孟子の本真に非ずして、後世依〔よ〕りて放〔なら〕いて之に託す者に似るなり。之が章句を為〔つく〕り、具〔とも〕に本文を載せ、章かに其の旨を別かち、分けて上下と為し、凡て十四巻なり。［七篇を分け、上下篇を作り、十四巻と為す］

（4）騶衍（鄒衍）の五徳終始説

戦国時代中期、周王朝は名ばかりの存在で、周王朝に代わる新たな王朝の出現が現実のものとなっていた。騶衍の五徳終始説は王朝が歴史的法則に従って出現すると予言したため注目された。

・**騶衍の事跡**：『史記』孟子荀卿〔モウシジユンケイ〕列伝に見える

孟子・荀卿すなわち孟子と荀子は、儒家の始祖・孔子以外では『史記』の篇名に名前を表記される唯一の例である。このことは孔子・孟子・荀子を『史記』の作者・司馬遷が儒家の主要人物と認めていたことを示す。その儒家の代表である孟子・荀子を扱う篇に騶衍の事跡が記述されることは、司馬遷は騶衍を儒者の一人と認めていたことを示す。その騶衍が思想的に孟子の影響下にあることは十分考えられる。

斉に三人の騶子がいた。トップの騶忌〔スウキ〕は、…宰相の印を受けた。孟子に先だつ。

次は騶衍で、孟子より後である。騶衍が見たものは、当時の国王が益々淫逸奢侈〔インイツシャシ〕となり、…そこで陰陽が盛衰するのを深く観察し、『怪迂之変〔カイウのヘン〕』『終始』『大聖』の諸篇十余万言を作った。その内容は極めて広大で普通と異なり、必ず先づ小事を検証してから、それを推し広めて

大きくし、無限大に至るものだった。（『終始』『大聖』は区切らず『終始大聖』で一語の可能性もある）

歴史については、今から遡〔さかのぼ〕って黄帝に至るまで、どの学者も皆な述べる所を先づ敘述し、世の盛衰にあわせて、其の時代の吉凶の前兆や法令制度を記載することを基本とし、それを推〔お〕し広げて、天地が未だ生ぜず、混沌茫洋として考察探求できない時まで至っている。

地理については、中国の名山・大川・峡谷・動物やその土地の生産物、珍奇な品々を先づ列挙し、それに基づいて推し広げ、人の見る事ができない海外に及ぶ。

以上を総合し、天地開闢以来、五徳の転移に伴って、それぞれの徳に相応〔ふさわ〕しい政治があり、五徳の転移に当たっては新しい徳に対応する前兆が現れた事を述べている。

騶衍の考えでは、「儒者の言う中国とは、天下を八十一分〔ハチジュウイチブン〕してその一分〔イチブン〕を占めるだけだ。中国は赤県神州〔セキケンシンシュウ〕と呼ばれる。赤県神州の内に九州が有り、禹〔ウ〕の秩序立てた九州はこれであり、本当の州の数〔かず〕とする事はできない。中国以外に赤県神州のような者が九あり、これが世間で言う九州である。小海〔ショウカイ〕が有ってこの九州を取り巻く。人や動物はその外側と往来できない。このような区域を形成しているものを一州〔イッシュウ〕とする。この様な者が九あり、その外側を大海が取り巻いている。これが天地の際である」と。（現代、騶衍のこの説を大九州説と呼んでいる）

騶衍の所説はすべてこの様なものである。しかし、**所説の帰着する所を要約すると、必ず仁義節倹〔ジンギセツケン〕や、君臣上下六親〔ショウカリクシン〕の実践すべき道に行き着く**。所説の始めの部分が空虚な絵空事なのである。

王公大人〔オウコウタイジン〕は初め其の所説を見聞すると、びっくりして傾倒したが、その後はそれを実践する事ができなかった。五徳の転移を説いたおかげで騶子は斉で重ぜられ、…そこで騶衍は『主運』を作った。

・騶衍の五徳終始説とは

次のa.～c.を骨子とする未来予言説。

a. 虞（舜）の土徳以下、夏木・殷金・周火・代周者水〔ダイシュウシャスイ〕という相勝の順序で歴史的に転移する徳を獲得した者が王となる。
b. 新王朝の出現時にはその徳に対応する気が瑞祥を現す。
c. 新王朝はその徳に対応する諸制度を完備しなければならない。

要約すると、a.は天与で非視覚的な徳、b.は徳に対応する視覚的な気、c.は徳に対応すべき王朝の当為〔トウイ〕・制度となる。

a.は(3)子思・孟軻の五行の先天的・内面的な徳に類似し、b. c.は(3)の後天的・外面的な行に類似して、明らかに(3)の影響を受けている。

『史記』孟子荀卿列伝によれば騶衍の所説の要点は仁義節倹・君臣上下六親の施〔シ〕、つまり儒家思想である。また、既述のように孟子荀卿列伝に孟子・荀子と並んでその事跡が記述されることも、騶衍の思想が儒家そのもの、あるいは儒家に近かったことを示す。五材的五行を天与で非視覚的な徳と結合することは『国語』魯語上〔ロゴショウ〕や『左伝』昭公32年に見える「地〔チ〕の五行」が後に天の五行となる契機になったと考えられる。

①鄒子には終始五徳が有り、勝てない相手が次に来る。木徳がその後を受け、金徳がその後を受け、火徳がその後を受け、水徳がその後を受ける。

『文選』巻六「魏都賦〔ギトのフ〕」李善注所引「七略」

鄒子の言：五徳の順次は、勝てない相手が次に来る。故に虞土〔グド〕、夏木〔カモク〕、殷金、周火の順となる。

『淮南子』斉俗訓〔セイゾククン〕・高誘注

②帝王の出現に先立ち、天は必ず瑞祥を人々に示す。黄帝の時、天は先ず大ミミズと大オケラを出現させた。それを見て黄帝は、土気が勝つと言った。土気が勝つので色は黄〔き〕を尊び、物事は土〔ド〕を基準とする。禹の時、天は先ず草木が秋冬に枯れない状態を出現させた。それを見て禹は、木気が勝つと言った。…湯〔トウ〕の時、天は先ず金〔かね〕の刃が水から生じる状態を出現させた。…文王の時、天は先ず火赤の烏〔からす〕が丹書をくわえて周の社〔シャ〕にとまった状態を出現させた。それを見て文王は火気が勝つと言った。…火の次に来るのは必ず水であるはずだ。天は水気が勝つ前兆を先ず示す。水気が勝つ時は色は黒を尊び、物事は水を基準とする。水気が勝つ状況が到来しても気附かず、水気の旺盛な期間が完了すれば、徳は次の土に移るだろう。　『呂氏春秋』有始覧〔ユウシラン〕「応同」

③始皇帝は五徳を終始させる順序から推測して、周は火徳を得ていたが、秦は周に代わった。終始する徳の順序は勝てない相手が次に来る。そこで、今は水徳の始めと考えた。年初を変更し、年初の儀式を十月一日に行う事にした。衣服や各種の旗は皆な黒〔くろ〕を尊んだ。数〔かず〕は六を基準とし、六寸や六尺を基準寸法とし、六頭だての馬車に乗った。黄河を徳水と改名。これらをやることで水徳の始めに符合させようと考えた。政治は人に厳しくし、物事は皆な法によって裁き、冷酷で情け容赦なくし、それらを徹底することで五徳の法則にかなうと考えた。『史記』秦始皇本紀

五徳終始説の素材としては(3)子思・孟軻の五行の他に、(1)の五材、『孟子』公孫丑下〔コウソンチュウカ〕および尽心下の王朝五百年周期説、同書公孫丑上の宰我・子貢・有若〔ユウジャク〕の言葉を借りての孔子の王者扱い、(『孟子』の二説を合わせると孔子の王朝が始まっていることになり、その場合に服色は儒服の黒となる、)『論語』の三代異制説（原三統説）などが本説の素材になったと推定できる。

方書の五行論

「医」の旧字は「醫」であり、その異体字に「毉」がある。「毉」は神に仕える巫〔フ〕が医術に携わっていたことを示し、「巫」は女性の医師を意味する言葉でもあった。このようなことから、医術・占卜〔センボク〕術・神仙術などを包括して方術と呼び、それに関わる書を方書〔ホウショ〕と呼ぶ。

(1)『雲夢睡虎地秦簡』日書

湖北省雲夢県〔ウンボウケン〕睡虎地〔スイコチ〕の秦墓から出土した竹簡「日書」には占いの基本構造として五行の相勝関係、方位・十干・十二支と五行の対応が明示され、干支・方位・五色の五行相生的配列から間接的に五行自体の相生関係の存在が認められる。

①金は木に勝つ、火は金に勝つ、水は火に勝つ、土は水に勝つ、木は土に勝つ、東方は木、南方は火、西方は金、北方は水、中央は土、‥‥　『雲夢睡虎地秦簡』日書甲種

②丙丁は火、火は金に勝つ、戊己は土、土は水に勝つ、庚辛は金、金は木に勝つ、壬癸は水、水は火に勝つ、酉丑巳〔ユウチュウシ〕は金、金は木に勝つ、未亥卯〔ミガイボウ〕は木、木は土に勝つ、辰申子〔シンシンシ〕は水、水は火に勝つ、(寅午戌〔インゴジュツ〕は火）‥‥『雲夢睡虎地秦簡』日書乙種

③春三月甲乙、以て殺す可からず、天 生〔セイ〕を張る所以の時なり。夏三月丙丁、以て殺す可からず、天 生を張る所以の時なり。秋三月庚辛、以て殺す可からず、天 生を張る所以の時なり。冬三月壬癸、以て殺す可からず、天 生を張る所以の時なり。

『雲夢睡虎地秦簡』日書甲種

五行と十二支の対応

㋐四方（卯午酉子）に木火金水を割り当て

東方―木―甲乙―春―　未亥卯
南方―火―丙丁―夏―（寅午戌）
中央―土―戊己
西方―金―庚辛―秋―　酉丑巳
北方―水―壬癸―冬―　辰申子

㋑四方を基準に逆時計回りに木火金水を割り当て

水	金	火	木	水	金	火	木	水	金	火	木
子（シ）	丑（チュウ）	寅（イン）	卯（ボウ）	辰（シン）	巳（シ）	午（ゴ）	未（ビ）	申（シン）	酉（ユウ）	戌（ジュツ）	亥（ガイ）

④甲乙に疾有り、父母 祟〔たたり〕を為す、之を肉に、東方従り来たる、裹〔つつ〕むに漆器を以てす、戊己〔ボキ〕に病〔ヘイ〕たり、庚〔コウ〕に間〔カン〕有り、辛〔シン〕に酢〔サク〕す、若し酢せざれば、煩い東方に居り、歳東方に在り、青色〔セイショク〕は死す。

（甲乙の日に発病したものは、父母の祟りであり、病源は肉、東からやってきたもので、漆器で包む。戊己の日にひどくなり、庚の日に軽くなり、辛の日に回復する。回復しない場合はその原因が東にあり、木星が東に在る時にあり、その人が青色〔あおいろ〕を呈する場合死亡する。）

（以下）

丙丁有疾、王父為祟、得之赤肉・雄雞・酒、庚辛病、壬有間、癸酢、若不酢、煩居南方、歳在南方、赤色死。

戊己有疾、巫堪行、王母為祟、得之於黄肉索魚・菫酒、壬癸病、甲有間、乙酢、若不酢、煩居邦中、歳在西方、黄色死。

庚辛有疾、外鬼殤死為祟、得之犬肉・鮮卵白色、甲乙病、丙有間、丁酢、若不酢、煩居西方、歳在西方、白色死。

壬癸有疾、母逢人、外鬼為祟、得之於酒脯脩節肉、丙丁病、戊有間、己酢、若不酢、煩居北方、歳在北方、黒色死。

『雲夢睡虎地秦簡』日書甲種

(2)『史記』倉公伝〔ソウコウデン〕によれば前漢・文帝期〔ブンテイキ〕(BC179～157）の淳于意〔ジュンウイ〕は五臓を五行に配当し疾病の予後を占った。

春になると案の定、病は重篤となり、（夏）四月になると、血を泄らして死んだ。下僕の病が分かった理由は、脾気が五蔵に悉く入り込み、五蔵それぞれの領域を侵し、交錯していた。それは脾を傷害する時の色であり、それを離れて見ると死気を含んだ黄色、近くで見ると死を表す黒みがかった青の様だったから。医者達はそれを理解せず、大虫が原因と考え、脾を傷害していた事に気づかなかった。春になって重篤となったのは、胃気は黄色で、黄色は土気である。土は木に勝たない。だから春になって死にそうになったのだ。

『史記』扁鵲倉公伝

この話に見られる病の状態と五行の関係

脾の障害による病状が春に重篤化した原因は、五行的に土である脾・胃は、木である春に勝たないからとあり、『雲夢睡虎地秦簡』日書甲種の発病日が五行的に勝つ相手の日に重篤化するのと、反対の方向性を持つ判断をしているようである。医薬への五行論の応用の初期段階と考えられる（表5)。

(3) 馬王堆漢墓出土『胎産書』には胎児が月毎に形成する器官の素材と類似五行の関係が見られる。

表５　『雲夢睡虎地秦簡』に見られる病の状態と五行の関係

発病日	病の由来 と その直接の病因		病日・間日	酢祭日	煩・歳死	
甲乙（木）	父母	肉・東方（木）・漆器 ⇒	戊己（土）→庚（金）	辛（金）⇒	東方	東方　青
↓		↓	↓	↓	↓	
丙丁（火）	王父（祖父）	赤肉（火）・雄雞・酒 ⇒	庚辛（金）→壬（水）	癸（水）⇒	南方	南方　赤
↓		↓	↓	↓	↓	
戊己（土）	王母（祖母）	黄色索魚（土）・堇酒 ⇒	壬癸（水）→甲（木）	乙（木）⇒	邦中	西方　黄
↓		↓	↓	↓	↓	
庚辛（金）	外鬼殤死	犬肉・鮮卵白色（金） ⇒	甲乙（木）→丙（火）	丁（火）⇒	西方	西方　白
↓		↓	↓	↓	↓	
壬癸（水）	外鬼	酒・脯脩節肉（水） ⇒	丙丁（火）→戊（土）	己（土）⇒	北方	北方　黒

発病日と病因が同じ五行。
甲乙・東方、丙丁・赤肉、戊己・黄色索魚、庚申・白色、五行的に勝つ相手の日には病〔やまい〕が重篤化、五行的に負ける相手の日に病が小康状態、および回復、病が回復しない原因は発病日と五行的に同じ方向に病因がある時、及び発病日と木星が五行的に同じ方向に居るとき、死亡するのは、病人が発病日と五行的に同じ色を呈するとき。
ここで使われている五行は、発病日と五行的に同じ範疇の項目（方向・五色）が最も大きな影響を与えるという考え方である。なお、病因として挙げられている火の雄雞と金の犬肉に注目すると、五畜の五行への配当は古文説に依っていると思われる。

（類似五行とは、木火土金水に新たな一要素が加わり、全体で六要素から成るものの仮称である。）

妊娠一ヶ月目は定まらない形と名附ける、…二ヶ月目に初めて肉のかたまりが出来る、…三ヶ月目に脂肪が出来る、…四ヶ月目に水を受け、そこで初めて血液を作る。…五ヶ月目に火を受け、そこで初めて気（生理的機能）を作る。…六ヶ月目に金を受け、そこで初めて筋を作る。…七ヶ月目に木を受け、そこで初めて骨を作る。…八ヶ月目に土を受け、そこで初めて皮膚を作る。…九ヶ月目に石を受け、そこで初めて毛髪を作る。…十ヶ月目に気が□□に行き渡る。それを…とする。

『胎産書』（□は原帛書での欠落部分）

ここには、水火金木土石という序列と、水・血、火・気、金・筋、木・骨、土・膚革、石・毫毛という類似五行と人体構成要素の組み合わせが見える。水・火・金・木・土は土・木・金・火・水という相勝の序列を逆に並べたものであるが、その序列の意義は不明である。この類似五行と人体構成要素の組み合わせについて見ると、水・血、火・気、木・骨、土・膚革、石・毫毛はそのものの形態や存在様式の類似性・共通性に基づくと考えられる。また、音韻的には火（曉微〔ギョウビ〕）と気（溪物〔ケイブツ〕）、土（透魚）と膚（幫魚〔ホウギョ〕）が関連する。

なお、馬王堆漢墓出土『足臂十一脈灸経』には『霊枢』経脈篇が記述する経脈の流注・是動病・所生病の祖形、および医薬書で用いられる三陰三陽（太陰・少陰・厥陰、太陽・少陽・陽明）が見える。

足、足太陽脈、出外踝婁中、上貫腨、出於郄、枝之下胂、其直者貫□、挾脊、□□、上於頭、枝顔、之耳、其直者貫目内眥、之鼻。其病、病足小指廃、腨痛、脚攣、脽痛、瀣痔、腰痛、挾脊痛、□痛、項痛、首痛、顔寒、瀣聾、目痛、鼽衄、数癲疾、諸病此物者、皆灸太陽脈。

足、足の太陽脈、外踝の窪みの中から出発

し、上行して腨〔ふくらはぎ〕を貫き、胻〔ヒカガミ（膝の後ろの窪み）〕に出て、枝別れして脊柱起立筋下部に行く。ひかがみから直進する者は□を貫き、脊骨をはさみ、□□、頭に上り、顔に枝別れし、耳に行く。頭から直進する者は目の内〔うち〕まなじりを貫き、鼻に行く。足の太陽脈の病は、足小指〔あしこゆび〕の麻痺、ふくらはぎの痛み、下肢痙攣、尻痛〔しりツウ〕、重篤な痔、腰痛、挾脊痛、□痛、項痛、首痛、顔の冷え、重篤な聾、眼痛、鼻血、しばしばの癲癇を病む。これらを病む場合、すべて太陽脈に灸する。

『足臂十一脈灸経』（□は原帛書での欠落部分）

（付）類似五行

上記の『胎産書』の他、次のようなものがある。

①六府＝水火金木土穀

人にとって生活必需品であるとともに、財産でもある

夏書〔カショ〕に「慶びを与えて励まし、威力を示して正しくさせ、九歌で進ませ、悪の道に行かせはしない」とある。人にとって重要な九功の徳は、皆な歌い広めるに足るもので、これが九歌である。その九功とは六府三事〔リップサンジ〕を言い、六府とは水火金木土穀の事で、三事とは正徳（民の徳を正すこと）・利用（民の使用する物質を円滑にすること）・厚生（民の生活を豊かにすること）である。この九功をうまく行うことが九功の徳なのである。支配者に九功の徳が無いと、下のものには喜びが無く、背く原因になる。

『左伝』文公7年

②六行

仁義礼智聖の行〔コウ〕に「楽」を加えたもの

徳には道徳性神明命の六理〔リクリ〕がある。六理は物を生じ、生じた物の中に六理は宿る。かくて陰陽天地人はすべて徳の六理を「内度（内なるノリ）」とし、「内度」が事功を成したものが「六法（六つの掟）」である。「六法」は内に蔵され、一方で外部に行き「六術（六つの仕業）」を成し遂げたものが「六行」である。かくて陰・陽それぞれには「六つの月」の時節があり、天地には上下東西南北の「六合」という職域があり、人には仁義礼智聖の行いがあり、その行いが調和すると楽しくなり、仁義礼智聖の行いと楽とを合わせて六つになったものを「六行」という。…人は謹んで「六行」を修得すれば「六法」に合致することができる。

賈誼〔カギ〕『新書〔シンジョ〕』六術

③方明〔ホウメイ〕：『儀礼〔ギライ〕』覲礼〔キンレイ〕に見える正六面体。上面の玄が五色より多い。

諸侯が天子に見〔まみ〕える時、「宮」（＝土で作った垣〔かき〕）を作り、…土の垣の中に三段の土壇を築き、下段の壇は…、中段は…、上段は…、上段の上には堂があり、堂（＝方形の封土）の上に一辺四尺の正立方体・方明を置く。方明は木製で一辺が四尺の立方体であり、各面に一色、合計六色を設ける。東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黒、上は玄〔あかぐろ〕、下は黄〔き〕である。さらに各面に一個、合計六個の玉をはめ込む。上は圭〔ケイ〕、下は璧〔ヘキ〕、南方は璋〔ショウ〕、西方は琥〔コ〕、北方は璜〔コウ〕、東方は珪〔ケイ〕である。

類似五行の小結：物事を一纏めにする数として六は五と共に古くから使われた。これら多くの出現時期は秦漢の際から前漢代であり、秦始皇の水徳説による数〔スウ〕六の重用や秦始皇・漢武帝の天への志向との関連が推定可能。天への志向に関連して言えば、方明は『管子』五行の中央を天地に分ける時令と共通し、

五行説は平面構造の他に立体構造を持つ可能性がある。

五行論の誕生と医学的発展　まとめ

五行論は3,000年以上前の殷代にその萌芽が見られる。陰陽論と関連を持ちつつ、長い時間をかけて徐々にその形を整えていった。明確に誕生と呼べるのは、紀元前300年をやや過ぎた頃、騶衍（鄒衍）が提唱した五徳終始説と陰陽主運説の登場の時である。

騶衍は当時の為政者たちが放漫な政治を行い、一方で庶民は苦しい生活を強いられている現状を憂え、周王朝建国の時の文王の治世の再現を夢見て研究を重ね、案出したのが先の二説である。二説の構造は儒家の先輩、子思と孟子が唱えた天から与えられた徳を実践により世のため人のために役立つ能力として磨きをかけ、最終的には誰もがより理想的な生き方が出来る政治体制を実現することである。今でもそうであるが、理想主義者はややもすると現実とかけ離れた空想世界に迷い込む傾向があるように、騶衍にもそのような傾向が見られたようだ。しかし、詰まるところ、彼の主張は「仁義節倹や、君臣上下六親」の実践、則ち社会的存在である人としてやるべき事をやることだ、と司馬遷も認めている。

一つのシステムができあがり、人々に受け入れられて流布すると、その本来の目的が忘れられ、便利な道具として一人歩きを始める。五行論もまた然り。決められたパターンに物事を当てはめ、問題を処理していくものというイメージが強い。われわれが五行論を扱う場合、遥か騶衍に、更には子思・孟子にも思いを馳せることがあるならば、無味乾燥な五行論が極めて人間味に富んだシステムとして蘇るのではなかろうか。